

お づ ひさ たり 歴史講演会

小津久足「陸奥日記」の世界

よみがえる江戸時代の松島

江戸時代後期、伊勢松阪の大商人だった小津久足。実は国文学の世界では、松尾芭蕉を超える紀行文学の名手と評価されています。その彼が、天保11年(1840)、江戸から松島へ旅をしました。久足の筆から、かつての松島・宮城の姿が生き生きとよみがえります。

開催日時 | 平成28年 **8月7日(日)** 13:30～(受付 13:00)

会場 | 高城避難所 3階多目的ホール (〒981-0215 松島町高城字町東二20-3)

参加費 | **無料** (申し込み不要)

アクセス | 東北本線松島駅から
徒歩約10分(約700m)
仙石線高城町駅から
徒歩約7分(約550m)
※会場には駐車場がありません。
公共交通機関をご利用ください。
JA 及び A&コープ駐車場への
駐車はご遠慮ください。



● 講演内容 ●

小津久足の人物像

『陸奥日記』から見えてくるもの
—19世紀の商人・旅行・地域—

小津久足と仙台・松島

松島町教育委員会の取り組み紹介

菱岡 憲司 (有明工業高等専門学校 准教授)

青柳 周一 (滋賀大学経済学部 教授)

高橋 陽一 (東北大学東北アジア研究センター助教)

本木 成美 (松島町教育委員会 学芸員)

主催

「陸奥日記」刊行会、東北大学災害科学国際研究所、東北大学東北アジア研究センター上廣歴史資料学研究部門、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワーク、松島町教育委員会「松島町の文化遺産を活かした地域活性化事業(平成28年度文化庁補助事業)」

協力: 蕃山房

「陸奥日記」 天保十一年（一八四〇）三月十五日

久足、大仰寺から見る松島に大感激。

「天橋立を、二〇個も合わせたようだ」

「松島の風景は富山にあり、実にその通りだ」

「これこそ真の絶景」

それより寺にくだり、「大仰寺」といふ額のかゝれる門をいり、「紫雲閣」といふ額のかゝれる小門より、書院の庭にいる。こゝより松島をのぞむさま、画にかくとも、筆もおよぶまじく、詞にもつくしがたく、天橋立を、はたちあはせたらんがごとし。

このあたりにて、「松島の景はとみにあり」とおしなべていふは、いかにも実によくかひて、このことばを、げにもといふより外、この山の景は、いはんことばもなければ、土俗の俚諺よくつくしたりといふべし。

この山よりは、大洋もひとめに入海のあなたに見えて、景地いとひろく、めのおよぶかぎりは、たゞ海山と島とばかりにて、かくたかき所ながらも、田などのひとつもみえぬは、よにめづらしくおぼえて、かゝるけしきも又、世にはあればあるものか、とあきるゝばかりにて、身におはぬほどなる景色ともいふべし。絶景とよにいふ景の、俗にちかきたぐひにあらず、真の絶景とは、これらをやいふべき。

歌よまんとすれば口つぐみ、たゞにやまんとすれば、かゝるあたりにきたるかひなきこゝちして、あふさきるさなり。

小津久足（おつ・ひさたり）

文化元年（一八〇四）に生まれ、安政五年（一八五八）十一月十三日に没しました。享年五十五歳でした。この人とかくお金持ちです。例の三井財閥ルーツと同じ松阪商人です。松坂百足町に店を構える、江戸店持ちの豪商「湯浅屋」六代目です。通称を与右衛門、安吉、与吉、進（新）蔵と称しました。号は桂窓、滝沢（曲亭）。馬琴の友人小津桂窓として知られる人です。滝沢馬琴との交友は深く、蔵書家として創作を側面から支えました。古今の稀書を蒐集した西荘文庫の主として知られています。その裕福な暮らしぶりのおかげでしょう、たくさんの紀行文作品を残しており、しかも傑作揃いです。でも、一般的にはまだまだ知られていません。